



春彼岸号

「雲 晴」第五十四号

令和七年三月一日発行

貞林院 瑞正寺

〒125-0041 東京都葛飾区東金町五丁目四六番五

電話 (03) 326-2713 四一五

FAX (03) 569-9159 九一五

譚巴拉ード歌

④ 唯我独尊（わがいのち）

かたときも 手放してはならない
われと わがいのちの 鼓動の あるかぎり
わがいのちへの 永遠の恋を



生まれがたき 人界に生れた わがいのちなのだから
人身うけがたし
いますでにうけた いのちなのだから

かたときも 失せることのない 情熱を
燃やし続けねばならない
彼国にまで 持ち続けねば ならない
わがいのちなのだから



永遠に なくなることのない わがいのちなのだから
ふたつとない ただひとつの わがいのちなのだから
他の誰のものでもない わがいのちなのだから

この故にこそ
釈迦は 天上天下唯我独尊と
教えたもうた いのちなのだから



天にも地にも ただ独りである
かけがえない わがいのちであり
これほど重厚で 無上甚深なものはない

ただわが一人にとどまることなく
自他平等に 一切の衆生とともにある
わが存在であることの 尊厳を忘れてはならない

平等施一切のための
わがいのちであることの
広天性にめざめることである

唱歌のふるさと 童謡のくに ②7

著：佐山哲郎



春の唄

ラララ赤い花束 車に積んで
春が来た来た 丘から町へ

「春の唄」と題された、この歌を覚えているだろうか。

作詞は喜志邦三、作曲内田光

続いて「すみれ買いましたよ あの花売りの かわい瞳に 春のゆめ」となるが、歌詞、メロディともになんとも明るい健康的な歌である。この内容から言つて、何となく、てつきり戦後のものだと思ひ込んでいた。

しかし。これい昭和十二年に分にあふれている。作られ流行った歌なのである。

戦後日本、はつきりといえるがNHKのラジオ歌謡というものがあつた。

「夏の思い出」「白い花咲く頃」

「雪の降る街を」などという、

いまでも歌い継がれる抒情的な名作がそこから幾つも出たが、

前述の「春の唄」はその前身ともいわれるもの一つである。

二番もまた、平明で楽しい気

分にあふれている。ラララ青い野菜も 市場について

春が来た来た村から町へ 朝の買物 あの新妻の

かごにあふれた 春の色

ここまで歌うと、子供たちは

「おや？」と思う。唱歌や童謡とは微かに肌合いが違う。

新妻？ 歌詞に違和感を感じると。これって大人の歌なのか

な、と思う。そうなのである。明確に大人の歌なのである。

華

花ひらひて 實をむすぶ



⑩ 正直・親切・勤勉

高田 都耶子

「正直・親切・勤勉」は、母が小学校から十八年間学んだ学園の校訓です。

母は何かあるといつもこの言葉を言っていました。思えば母の同級生もそうでした。同じ学園に通い始めた私も、そして在校生たちにも受け継がれています。

数年前の同窓会主催の講演会、参加者へのお土産は消しゴムでした。赤と青と黄色の三色で、それぞれに「正直

「親切」「勤勉」の文字が印刷されていて、同窓会のウィットに感じ入りまし

た。講演会が終わって帰って行く人たちに、同窓会理事が「参加のお土産、忘れずに持ち帰ってくださいね。あ、でも一人ひとつずつですからね」と呼びかけました。それに応えてあちこちから返ってきたのは「大丈夫です！正直・親切・勤勉ですから」と。思わず微笑んでしまいました。正直は何と清々しいことでしょうか。

日本人は正直・親切・勤勉と暮らしてきたと思うのです。上野駅で失くし

た買ったばかりのマフラーも、品川駅前で旅行鞆から千切れて落ちてた名札も、麹町で落としたパン屋さんのポイ

ントカードも戻ってきました。これはもう随分前のことですが、同じアパ

ルトメントに住んでいて親しくなったカナダ大使館勤務のローラという女性がいきました。長い金髪を風になびかせて

歩く青い目の素敵な彼女は、実は頼もしい大使館付きの武官でありました。カナダに帰国の日が近づいたある日、

一口法話



「責めるのをやめよう」

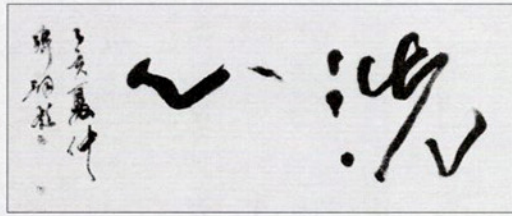
お寺の標語などに対して「いいこと書いてあるけど…」とにがわらわらしたことはないだろうか。

確かに、お寺では理想のことを掲げています。しかし、できないから「しない」では、もったいないこと

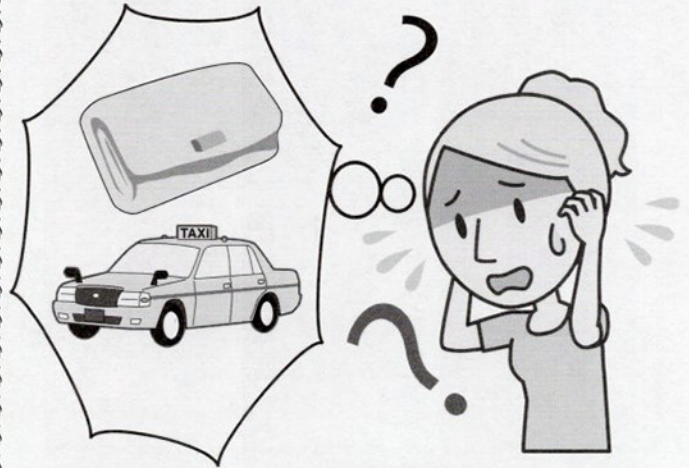
たとえできなくても「しよう」と努めること」が大事です。行い続けることで学びや気づきが得られることも多いものです。宗祖法然上人も「自分

分は罪悪深重の凡夫である。その私が救われる道はお念仏を称え続けるしかない」と仰っています。口で称える易しい行ですが、日々続けることは容易ではありません。でも、仏さまの救いを求め、コツコツと続けることで救いの道が開けるのです。私たちは、物事がうまくいかない時、自分を責め、ダメ出しをしてしまふことがあります。責任回避をしま

誘いの書



送別会での帰り道、彼女はハンドバッグをタクシーにおき忘れてしまいました。途方に暮れて私の部屋を訪ねて来たとき、彼女と仲良しの友人たちが集まっていました。泣きべそ顔のローラに「大丈夫よ、見つかるわよ」「何色のタクシーだったか覚えてる?」「どこからどこまで乗車したの」と質問を重ねました。そんなこと聞いて何になるの、気休めは要らない。どうせ見つからないと落ち込む彼女に「良いから教えて。泣くのは後よ。思い出して」とはげましながら、タクシー会社や忘れ物係に連絡するうちに、程なく六本木の麻布警察で預かってかれていると判りました。「ほら、やっぱりあったじゃない」と言う私たちに、狐に摘まれたような面持ちのローラでした。そ



「洗心」

故林 錦洞書

貞林院瑞正寺 住職 林 清方

行草で書かれたこの作品は添え書きには「巳亥夏仲 錦洞影」とあります。丁度三十年前、平成七年の夏なかばに日本・韓国・中国の代表的な書家による三人展に出品された作品の一つです。

「洗心」という文字を多少滲むような薄墨で柔らかなタッチ

の後彼女は、何年もこんな素晴らしい国に赴任しながら、日本という国のことも、日本語の一つも学ぼうとしなかったことを深く後悔したようです。そんなローラへの饒別の気持ちを含めて、彼女が行きたがっていた益子焼の里まで友人達と我が愛犬とで車で連れて行きました。カーナビも無かった時代で地図を見ながら右左だと辿り着いた珍道中、彼女はとても喜んでくれました。懐かしい思い出です。

日本人の正直さや親切が、その後の彼女の人生の宝物になってくれたと信じています。こんな日本がずっと続いて欲しい。でもただ願うだけでなくきちんと次の世代に渡すべく心しなければ。それが今に生きる私たちの使命ではないでしょうか。

で表現されており、軸装の茶掛けで表具されており、正にお茶室などにはピッタリの雰囲気が出されております。

日常生活の中で心が洗われるような体験をされたことはあるでしょうか。旅先で清らかな川の水、海に沈む真っ赤な夕日など素晴らしい景色を見た時にそのような気持ちになったことがあるかもしれません。

仏教でいう「洗心」とは心を洗う、つまり懺悔反省の心を意

う自分もいます。それらは心地よいものではありません。自分にも色々な事情があるように、各人各様の事情があるのです。それを自分の視点だけで人を責めても円満な解決にはなりません。人は誰しもコンプレックス(劣等感)を持っています。他人と比べて、足りない所を責めると委縮してしまいます。それよりも、今のありのままの自分を受け入れ、自分のできている所はほめて、自分を肯定していく方が生き方として楽です。自分や人を責めることで良いことはありません。大らかに寛容に、コッコツと生活していきたいものです。

(知恩院布教師会ホームページより)

味します。私たちは日々自分では気がつかないうちに誤りを犯していたり、人を妬んだり恨んだり絶えず心に塵やほこりを溜込んでいるものです。その知らず知らずのうちに溜まった心の塵を懺悔・反省というお手入れで落とすことが洗心です。神社仏閣の入口にはお手洗場がありますが、これは口をゆすぎ手も洗うだけでなく、神様仏様にお会いする前に、先ず自分の心も清めることが大事です。

春の彼岸法要のご案内

本年の春の彼岸法要につきましましては左記のとおり行います。

塔婆をご希望の方は、お早めに電話・ファックス・メール等にて寺までお申し込みください。

三月二十日(木) 正午

塔婆料 三千元

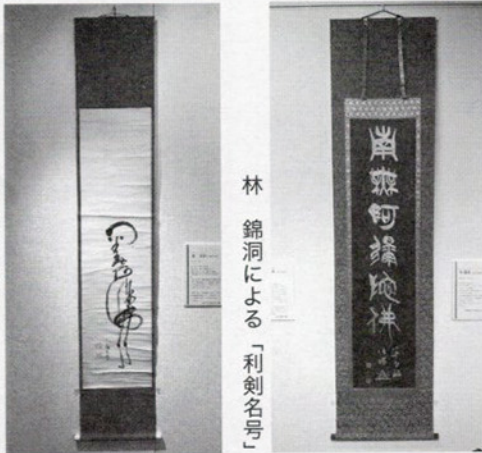
回向料(お布施) 志納

【寺からのお願い】

本堂右手の入口につきましては防犯上、常に施錠がされております。そのためお参りやご用がある際はインターホンを押して頂き対応をしておりますのでご理解をお願いします。なお住職夫人は数年前より歩行が大変遅くなってきました。お待たせすることもありますので、こちらについてもご了承ください。お墓参りの際以外にお手洗いはありませんので、ご遠慮なくインターホンを押して室内のトイレをお使いください。

浄土宗高僧名号展

昨年は浄土宗開宗八百五十年を迎えました。そのため宗では様々な慶讃事業を行ってきましたが、その内の一つとして昨年十二月にセントラルミュージアム銀座にて「浄土宗高僧名号展」が開催されました。お名号とは「南無阿弥陀仏」のことであり、総本山・大本山をはじめ全国の浄土宗寺院に所蔵されている歴代高僧の揮毫によるお名号を調査し、それらを集めて一堂に展示されたものです。



林 錦洞による「利剣名号」

林 祖洞による絵のようなお名号

先代林錦洞と先々代林祖洞は共に浄土宗を代表する書家でもあったので、この度の名号展に出品させて頂

きました。開宗八百五十年記念事業に際し、多くの方々目に触れる機会を与えて頂きましたことに感謝しております。

開宗八百五十年特別企画 「名号展覧会」

前述の「浄土宗高僧名号展」とは別に昨年十一月には京都市美術館にて浄土宗芸術家協会主催により、全国寺院のご住職揮毫による「名号展覧会」が開催されました。この記念すべき機会にと思い、兄である岩手善明寺住職林英道と共に出品いたしました。兄の作品は祖父林祖洞の作品を手本に仕上げたものです。



住職の揮毫によるお名号

善明寺住職によるお名号

(貞林院瑞正寺)